

● 選評

小島なお

・白野（新潟県）

花まみれ雨まみれ白い指まみれ

あー、いのちをすてたくないなあ

花まみれの花も、雨まみれの雨も、白い指まみれの日々も、みないのちを捨ててゆく過程を見せている。いのちをすてたくないなあ、と言っているのちを捨ててゆく逆行のきらめき。

・合川秋穂（京都府）

文末に近づくに連れ君がいる

たった一文にだって物語がある。書き出しにはいなかったはずの君。しかし徐々に気配や影が滲み出し、君は一文のなかに息づきはじめる。文字のなかの君を迎えにゆく私。

・風船（東京都）

自分は

存在するだけでいいらしいけど

存在しないだけでもいい

「存在するだけ」と「存在しないだけ」。それはもうほとんど同じこと。「在る」ことはつねに「無い」ことを際立たせ、「無い」ことはつねに「在る」ことを夢

想させる。

・花澤 希海（千葉県）

数列の朽ちれば麒麟草まわる

法則や規則、理性によって統制されるものはいずれ朽ちる。そのちに広がるのは生理のそよぐ世界。麒麟草の黄の輪の秩序を思う。

・暮田真名（東京都）

春の電気を

つけっぱなしで

部屋の電気をつけっぱなしにしてしまうように、春という季節も。電気の点りっぱなしの春は、ぼんやりと永遠に似たあやうさとあかるさで私たちを包む。

・青木雅（埼玉県）

お魚さんはみんな頭がおかしい

「お魚さん」の幼稚な擬人化から「みんな頭がおかしい」の暴力的な排他へ。異様なアンビバレンスは強力な磁石のように読者を否応なく引きつける。

・翠（東京都）

見知らぬ男が

わたしの天秤に腰掛けて

週間雑誌を読み漁る

見知らぬ男の故知らぬ行為。この天秤のもう一方にはなにがのっているのか。男が天秤の均衡をついに崩すとき、「わたし」にあたらしい展開が訪れる。

・豊富 瑞歩（茨城県）

つるつるって

おでんのたまご吸うときの

どこかでおかしくなってる時空

あつあつのおでん。入り口も出口もないたまご。たまごはいのちの部屋であり、今、ここは私のいのちの部屋である。部屋は時空と言い換えてもいい。ふたつの時空がひとつになるとき、どこか、なにかが、すこしく歪む。

・長谷川柊香（宮城県）

内濡れた

マスクを

振れば

国旗めく

国旗は国の象徴。マスクは何の象徴として振られているのだろう。白旗にも似たマスクの白。保守的で、やさしく、脆弱なまぼろしの国家を想像してみる。

・武中 義人（岡山県）

サルスベリの花のように

笑い転げて―

きみ こんな所を

さわるものではない！

別名はくすぐりの木。さるすべりの花のわさわさ赤い笑い声。触ればたちまちに  
笑い出すような「こんな所」は、きっと世界のあちこちにある。